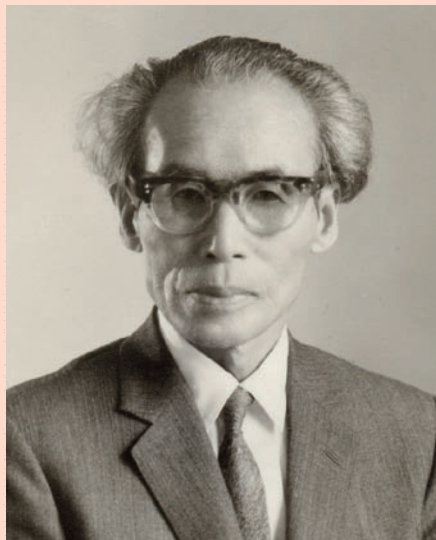


もりもと かく たん

森本 覚丹

宇部市
(1896～1996)



【著作】

邦訳『カレワラ』（昭和12・日本書莊）
『詩と音楽』（昭和16・理想社）
『高杉晋作』（昭和18・高山書院）ほか

明治二十九年（一八九六）といえば、日清戦争直後のことで、日本が世界の注目を浴び、また世界に目を向けた時でもある。そのころ、椿と竹藪と桜に囲まれた、小さな萱葺きの住居で森本覚丹は生まれた。敷地内に享保十八年（一七三四）建立の霊泉地蔵があり、そのすぐ側に、どんな干天の時も湧き水が切れたことがないという霊泉がある。一説によれば、父親は筑前琵琶を弾き、その弦より弾き出される幽玄な響きを聴いて覚丹は育ったという。後年、音楽評論家として、また美学者として活躍した素地はこの時代に備わったものと思われる。

現在の宇部市厚南小学校から、小野田私立興風中学校（現県立小野田高等学校）へ進み、抜群の成績で早稲田大学文学部の北欧文学の課程に入った。トルストイの人道主義に感銘し、その頃より標題音楽に心酔し、当時の音楽専門雑誌にも屢々投稿して、その才能を認められ、日本音楽協会（会長山田耕柁）の役員にも選ばれた。

ここでフィンランドの大作曲家、シベリウスの曲と出合い、その作品の源泉とも言うべきフィンランドの国民的叙事詩「カレワラ」を知る。昭和五年（一九三〇）、三十四歳の時、五十章、二万二千七百九十四行からなる大作「カレワラ」の初の邦訳に取り組んだ。二度の改訂を経て、昭和十二年（一九三七）、やっと上梓するに至る。その功績が認められ、フィンランド政府から白バラ一等勲章を贈られた。

昭和十八年（一九四三）頃は東京世田谷区北沢に住んでいたが、郷土の偉人、高杉晋作に興味を持ち、晋作の孫で当時麻布に住んでいた高杉春太郎を訪ね、綿密な資料を得て『高杉晋作』を出している。この本の特色は、晋作生誕から死に至るまで精密な年表がついていることである。

昭和二十年（一九四五）四月に、東京から郷里に疎開し、終戦となる。「郷土の復興は、芸術文化をもって廃墟を文化国家としなければ・・・」と日野巖（山大農学部長）、山崎青鐘（俳句）、木岡義靖（小野田市立図書館長）等と語り、宇部文化協会を昭和二十一年（一九四六）に発足。『宇部文化』という同人機関誌を発刊、三号まで出した。この時に発足したのが宇部芸術座である。爾来、劇団は今日まで活発に公演活動を続けている。後年、篆刻の会も作り、毎年展示会等もしている。

山口大学講師、山口芸術短期大学音楽科主任教授、聖カタリナ短大教授、山口県演劇協会会長、宇部文化連盟代表理事等、多くの要職を経て、九十九歳十ヶ月で帰幽した。

森本が若い者に伝えた言葉は、ベートーベンの箴言「美を薦めるためならば、破ってならぬ法則はない」と、「よい材料を選びなさい、生煮えは食へぬ」。

昭和四十五年（一九七〇）、勲四等瑞宝章を受ける。

晩年は良寛の枯淡な生涯に心酔し、篆書でその詩等を書いていた。

（文・奥野保正）

森本覚丹 年譜

（提供・奥野保正）

明治29（一八九六）年	
昭和12（一九三七）年	四一歳
昭和13（一九三八）年	四二歳
昭和18（一九四三）年	四七歳
昭和20（一九四五）年	四九歳
昭和21（一九四六）年	五〇歳
昭和27（一九五二）年	五六歳
昭和33（一九五八）年	六二歳
昭和45（一九七〇）年	七四歳
昭和48（一九七三）年	七七歳
昭和53（一九七八）年	八二歳
平成8（一九九六）年	九九歳

3月22日、山口県宇部市厚南区岡田屋に生まれる。厚南小学校、私立興風中学校（現・小野田高校）を経て、早稲田大学文学部へ入学。一時肺カタルにて療養生活。

『カレワラ』の邦訳完成。（日本書莊刊）

フィンランド政府より「白バラ一等勲章」を贈られる。

『高杉晋作』上梓。（昭18・高山書院刊）

4月、郷里宇部市厚南区岡田屋へ帰る。

宇部市文化協会発足。（劇団宇部芸術座発会）

『詩と音楽』（理想社）刊行。

宇部文化連盟発足。初代代表理事。

山口芸術短期大学発足。初代音楽科主任教授。

9月1日、『先駆者ベルリオーズ』（青楓書屋）刊行。

7月10日、『創造者リスト』（青楓書屋）刊行。

7月『詩と音楽』（青楓書屋）刊行。

死去。

【関連情報】

翻訳書・・・『チャイコフスキーの手紙』（音楽世界社）『交響曲詩』（理想社）
『モード・トルストイの生涯』（昭11・日本書莊）『ワインガルトナー近代交響曲』（出版社不明）
『交響曲物語』（昭27・理想社）『カレワラフィンランド叙事詩上・中・下』（岩波書店）
『カレワラフィンランド国民的叙事詩上・下』（昭58・講談社学術文庫）

（解題）

カンテレという琴を奏して人間はもとより鳥獣木石をはじめ森羅万象を恍惚として酔わしめる大音楽家ワイナモイネンが最も偉い人間になっている。ここでは智は剣に勝り、文は武に勝っている。しかも智や文は歌や音楽に表象せられている。……『カレワラ』は戦争物語ではなく、また、騎士は一人もいない。ワイナモイネンは武器をもつてでなく、歌や音楽の力で他を征服するのである。